

コロナ禍で見えてきたこと –健康を支えるもの

2022年4月11日

公益財団法人 アジア保健研修所 (AHI)

事務局長 林かぐみ

はじめに

本日はお招きくださりありがとうございます。私が最初に貴クラブの渡辺成洋様にお目にかかったのが、2013年9月。同年11月にクラブメンバー数名でフィリピン、ミンダナオを訪問されました。これまでのご協力にあらためて感謝申し上げます。

コロナ禍のこの2年。ご協力くださっているフィリピンの現地の状況を昨日聞いたところ、ダバオ市にあるダバオ医科大学付属プライマリヘルスケア研修所 (IPHC) のジョバスさんから次のような応答が来ました。

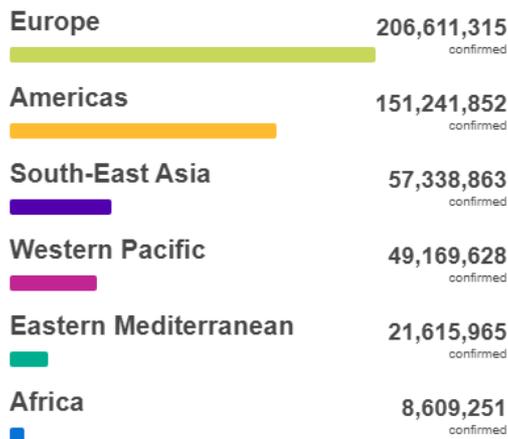
- *フィリピン全体を見ても、減少傾向にあり、ワクチン接種済みの人は人口の72%以上に上るが、ただ3回目接種はまだあまり進んでいない。ダバオ医科大学病院も以前は、コロナ患者の受け入れの指定病院であったが、今は指定をはずれた。
- *IPHCは、安全対策をとりながら、活動地域でのコロナを含む保健教育を行っている。



フィリピン、ニューコレリア。
左：啓発のためのバナーを設置。
上：子どもたちへの接種も進む。

コロナが浮彫にしたもの

今日はこの2年強のコロナ禍の経験から、何が見えるかということをお話したいと思います。世界保健機関 (WHO) のホームページによると、4月8日現在、世界の感染者数は、494,587,638人。お気づきのように、5億近くのうち、圧倒的に欧州やアメリカでの数が多くなっています。これも背景のひとつとなり、たいへん短期間で開発されたワクチンを日本でも昨年2月以降受けることができるようになりました。



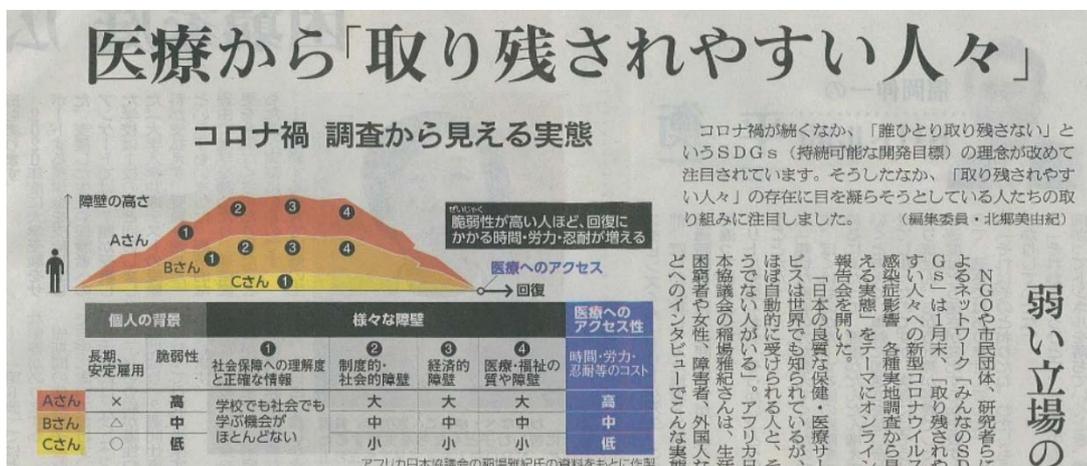
出典：WHO ホームページ

一方、感染の世界的拡大後まもなく、ワクチンを含む医薬品の開発と供給のための国際的な仕組みが作られ、世界の国々に届けることが意図されました。

しかしながら現実には世界を見ると大きな格差があります。たとえばワクチン格差。少なくとも1回接種している人の割合は、高所得国では約71%に対し、低所得国では約15%にしかすぎません。

次々と変異株が現れる実態からみても、人もモノもグローバルに動く現代の社会においては、「私だけは安全に」は不可能です。世界中のすべての人が安全にならなければ、誰も安全とは言えません。まさに地球規模での対応とそのための国際協調が必要です。

一方、国内を見ても、保健医療に手が届きにくい人たち、「取り残されやすい」人たちがいるという現実も浮彫になりました。雇用形態は、すぐに経済的な要因に結び付き、そのほかにも、情報にアクセスしにくい場合や制度が障壁になるという状況もあります。



出典：朝日新聞 2022年2月28日

このように国際的、国内的いずれにおいても、コロナ禍は「手にはいる人とはいない人」の格差を浮彫にしたと言えるのではないのでしょうか。

「草の根」での対応

しかしながら格差の解消を、と言っても容易なことではありません。ここでは、誰も取り残すことのないようにコロナ感染のピーク時に地域住民が協力して主体的に動いたという

タイのバンコクでの事例を紹介したいと思います。昨年 4 月以降感染が急拡大したタイでは、行政や医療機関の対応も間に合わず、特に人びとが密集して住むバンコクのスラム地域では感染のリスクも高い状況でした。そのような中、住民グループが外部からの協力を得て、地域にあるお寺や公的なスペースにコミュニティ療養（隔離）センターを設置しました。

写真は、バンコク北部にある 227 世帯人口 851 人のプーンサブ・コミュニティです。昨年 11 月、この地域のリーダーの女性にオンラインで話を聞きました。彼女は、スラム住民連合のメンバーとして以前から居住環境改善のために行政に働きかけを行っていたそうです。コロナ禍となり、まず地域行ったのは、正しく恐れ、正しく対処するための住民の勉強会でした。それを基に、自分たちにできる対応が考え出し、実行していきました。

自宅にいると家族へ感染が広がるが、病院にはいることもできないという切実な状況下、身近なところで安全も滞在できる場所、情報を得られる場所を自分たちの力で作り出しました。住民の中で、物資や食料の調達チームや調理・食事宅配チームを編成し、また陽性となった人の症状を確認するチームは、医療従事者と連携し適切な対応がとられるようにしました。



タイ、プーンサブ・コミュニティ

左：コミュニティ療養センターになった保育所で療養中の女性
上：外へ出られない世帯へ食料を届ける

自然災害にしる、感染症にしる、経済的・社会的な脆弱性が一層困難を大きくしてしまいます。そのような中、地域での社会的ネットワークとそれを基盤にした機動力が、人びとの健康と生活を支えるものとなります。

それが最大限に生かされ、誰かが「取り残される」ことがないよう、課題への対応力が育まれる。そのような国際協力のあり方をあらためて考えていきたいと思ひます。